

科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」
アドバイザー委員会 小委員会 (第 3 回)
議事要旨

1. 日時

令和 7 年 6 月 24 日 (火) 14 時 00 分から 15 時 30 分までの間

2. 場所

オンライン (Zoom)

3. 出席者

(科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」アドバイザー委員会 委員)

有信 睦弘 広島県立鞆啓大学 学長

(欠席) 狩野 光伸 岡山大学副理事・副学長・学術研究院ヘルスシステム統合科学学域 教授

長岡 貞男 経済産業研究所 ファカルティ・フェロー

(外部有識者)

青島 矢一 一橋大学 イノベーション研究センター センター長 教授

岡村 麻子 科学技術・学術政策研究所 主任研究官

小林 傳司 国立研究開発法人 科学技術振興機構 社会技術研究開発センター センター長

4. 議事概要

(1) SciREX 事業終了後の全体像案について

事務局より、資料 1-1～資料 1-2 を用いて説明があった。

(2) ディスカッション

委員より以下のような発言があった。

資料について

- 具体的なプランの前に、STI 政策のための科学の目的や重要性を定義したうえで、これまでの成果を踏まえ、発展の方向性を示すという構図にしたほうがよい。
- 人材育成拠点と SciREX センターを含めたベースとなるネットワークが今後発展していくためには何が必要なのかということに続いて、連携強化という流れだと思う。その流れをクリアにすればよいのではないか。
- 各拠点で整備した教育プログラムなど既存の取組についての言及があるべき。
- ネットワーク内で、各拠点や NISTEP、JST、政策科学推進室などの既存メンバーがどう関わって

いくつかを具体的に記載すれば、自分事として考え、実現に近づけることができるのではないか。

コミュニティ・人材ネットワークについて

- ネットワークの活力を維持し続ける仕組みがないといけない。
- ネットワークが機能するためにはコアになる大学や研究機関（各拠点や NISTEP、JST など）が自立的に能力を高めて発信していく必要があるが、それを前提としてよいのか。
- ネットワークの維持には相当のマンパワーと予算が必要。本気で行うのであれば、「STI 政策のための科学」をどう推進していくかという理念を示すべきで、その上でどのように推進していくかという手段が示されている必要がある。実際にネットワークの維持はどの主体が行うのかについても考える必要がある。
- EuSPRI は大学が連名で組織を作り、学会を運営している。政府の主導の可否は別として、共同体が自主的に形成されるとよい。
- 公的シンクタンク同士の連携についてはニーズがあるがきっかけがなく、こういったネットワークの中に具体的に位置づけることで連携が進むかもしれない。
- 各シンクタンクが持つデータの共有が進んでいない。誰かが仲介役を担う必要がある。

「STI 政策のための科学」の振興について

- ネットワークの活用以前に、まず「STI 政策のための科学」を振興するという目的があるのではないか。そのためには大まかでも目的を定義しておく必要がある。
- 「STI 政策のための科学」とは何かという議論は初期にもよくされていた。拠点ごとに切り口が異なっているが、漠としてでもこういうものだと言ってよいのではないか。
- 「STI 政策のための科学」の領域は、学問体系として成立しにくく、単独で学位をとれるコースになっておらず、副専攻的な扱いにとどまっているため、学位以外で当該分野を学ぶ付加価値を与える必要がある。
- 研究者にとってのインセンティブは、研究資金を獲得でき、論文をかけることである。研究機関にとっては補助金がもらえることがインセンティブとなる。そういった手当をせずに、志を共有するだけで学会のような共同体が形成して自走していくことを期待するのは無理があるように思われる。
- 学位を取得できるかどうかや独自の学会を作るということは必ずしも重要ではない。「STI 政策のための科学」の分野で論文を書く際には、良いテーマとデータがあれば、社会学や経済学のトップジャーナルに投稿できる。発表の場は既存の学会でも良い。
- 若い人材のキャリアイメージはだいぶ変わってきている。当該分野で学んでいた研究者が、大学に留まるのではなく、民間企業や公的シンクタンクを行き来しながらキャリアを構築し、高く評価されるようになったという例も出てきている。こういったキャリアパスを進む人材が日本でもようやく出てきており、こういった人材をきちんと処遇する仕組みが必要。

その他

- 共進化プログラムについて、行政官と研究者のコラボレーションを進めるためのプログラムを今後も進めていくのであれば、これまでの事業の反省点を生かすべき。スキームをじっくり作りこむための時間は取るべき。

以上